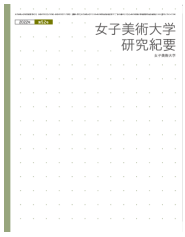

手を伝う病、手が語る思い：米作家S・アンダスン『ワインズバーグ・オハイオ』における手の表象

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2022-09-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 鷲谷, 里美, Washiya, Satomi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://joshibi.repo.nii.ac.jp/records/60.1

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

研究報告

手を伝う病、手が語る思い

米作家S・アンダスン『ワインズバーグ・オハイオ』における手の表象

▸鷲谷里美

はじめに

筆者がこの原稿を書いている2021年9月現在、日本は新型コロナウィルス第5波の真っただ中にあり、2019年から続く世界的なパンデミックは未だ収束していない。世界的な感染症の流行は、およそ百年前にも人類を襲った。いわゆる「スペイン風邪」の流行である。「スペイン風邪」が流行した1919年にアメリカで出版され、未だに多くの読者に読み継がれているアメリカ文学作品の一つにシャーウッド・アンダスンの『ワインズバーグ・オハイオ』という作品がある。日本で新型コロナウィルスがはやり始めてから、頻繁に「手洗いうがい」の必要性が取り上げられ、「密集・密接・密閉」を避けようという感染防止対策が連日連夜メディアで語られている。筆者はこの様に「手を伝う」病が流行った100年前に出版された小説のことを、再び「手を伝う」病が流行っている現在に頻繁に思い起こさずにはいられない。それはこの小説が、〈手〉の物語であり、作者による巧みな〈手〉の描写が、登場人物たちの気持ちを効果的に表現していて、それらの表現が積み重なって、ワインズバーグの閉塞的な社会の雰囲気を醸し出しているからだ。

『ワインズバーグ・オハイオ』が描くアメリカ社会の閉塞性は、それ以降のアメリカ小説が扱っている人々の疎外感にもつながっているので[1]、今後の研究でほかの作家についても「社会性」や「孤独」について考察を深めていきたいが、本小論においては、『ワインズバーグ・オハイオ』に論点を絞り、いかに〈手〉の描写が登場する人々の孤独な心理を浮き彫りにしているかを論じていきたい。

1.『ワインズバーグ・オハイオ』の小説形式と登場人物

『ワインズバーグ・オハイオ』の舞台はオハイオ州の架空の町ワインズバーグである。「いびつな者たちの書」という短編を筆頭に22編の短編が、主人公のジョージ・ウィラードの成長物語を軸に有機的に重なって一つの小説として完成している。22編の物語には、それぞれそのエピソードの主人公と言える人物が描かれ、彼らは、ジョージ・ウィラードの友人であったり教師であったり家族であったり恋人であったり、何かしらジョージ・ウィラードとかかわりがあり、それぞれが孤独を抱えている。あるものは別の村でトラブルを起こしてワインズバーグにやってきており、あるものは自分たち家族が町の人々から「変人」と思われることに耐え難い苦痛を感じており、またあるものは「自分を理解するものは誰もいない」という信条を持っている。それら孤独な人々は、思春期から青年期に移行しつつある町の新聞記者ジョージ・ウィラードとひと時を共にして自らの心情をウィラードに吐露する。

ジョージ・ウィラード本人は町のさびれたホテルを営む父親とうまくいっておらず、都会に出て作家になりたいと思っている。彼の心情を理解していたのは病気の母親で、息子の「成長しようと足掻く、秘密の何か」(Anderson, 43；上岡, 39)[2]に悪影響な世俗的な父親（＝自分の夫）に憎悪と殺意すら抱く。母親は娘時代の自分の果たされなかった夢を思い返すが、病には勝てず死んでいく。母の死後、個性的な町の人々とのやり取りののちに成長したジョージが汽車に乗ってワインズバーグを旅立つ「旅立ち」というエピソードで小説は終わる。22編のエピソードには以下のようなサブタイトルが付けられている。いびつな者たちの書／手／紙の玉／母／哲学者／誰も知らない／狂信者／アイディアに溢れた人／冒険／品位／考え込む人／タンディ／神の力／教師／孤独／目覚め／「変人」／語られなかった嘘／飲酒／死／見識／旅立ち、である[3]。

先行研究においては、この小説を「夢」という側面から論じたものがあるが[4]、本稿では〈手〉に着目して、〈手〉がそれぞれのエピソードを繋ぐモチーフであり、閉塞感や人々の疎外・孤独を描く通低音になっていることを例証していく。

2. 各エピソードにおける〈手〉の描かれ方

2.1.「手」におけるウィング・ビドルボームと手の描写

『ワインズバーグ・オハイオ』の最初のエピソードは、この小説の前口上のような「いびつな者たちの書」であり、そ

の中で、作者アンダスンを思わせる老作家は、自分が今までに出会ってきた「真理」に囚われてグロテスクになっている者たちについて語る。その次のエピソードが「手」である。このエピソードにおける主人公はウィング・ビドルボームという男性で、彼は別の村で別の名前で教師をしていたが、若い教え子たちに教育熱心な青年であった。ある日、ある教え子からの告発で、ビドルボームが教え子に対して同性愛的な誘惑をしていたという嫌疑がかけられてしまう。生徒たちの言い分では、「先生は両腕を僕の体に回した」（Anderson, 32；上岡, 23）のであり、「先生は指でいつも僕の髪をもてあそぶ」（Anderson, 32；上岡, 23）のだそうだ[5]。怒った教え子の父親たちからリンチを受けそうになりビドルボームは追放されてしまう。父親たちからは「その手を引っ込めておけ」とののしられ、ビドルボームは教師を辞め、ワインズバーグに逃れ住むようになる。ワインズバーグではジョージ・ウィラードのみが話しやすい相手であるが、ジョージ・ウィラードもビドルボームの独特な手の動きが気になって、ビドルボームの過去を知らないウィラードは手について彼に聞いてみようと思うものの、聞き出せないでいる。

ビドルボームの手の動きは「籠の中の鳥のバタつき」（Anderson, 28；上岡, 17）[6]にたとえられている。自分の身の上を話したくても話せない、同性愛に対する社会的な抑圧と、それへの恐怖から、もしも過去がばれたらウィラードからもワインズバーグからも離れなくてはいけなくなるという心の不安が、手の動きに表現されている。

ビドルボームの手の動きだけでなく、生徒の親たちの行動を描くのにも手がクローズアップされている。「ある午後男がビドルボームを校庭に呼び出し拳で殴り始めた」（Anderson, 32；上岡, 23）のだが、彼は「硬い拳骨で学校教師の怯えた顔を殴れば殴るほど、怒りは激しくなった」（Anderson, 32；上岡, 23）のだった[7]。その日の夜、ビドルボームが住んでいた家の戸口にランタンを手に持った十数人の男たちがやってきて、男の一人は手にロープを持っていた。

このように、読者が読むワインズバーグの最初のエピソードが「手」であり、その中で〈手〉の持つ役割は当然ながら大きなもので、それは『ワインズバーグ・オハイオ』の基調低音となって小説全体につながっていく。

2.2.「紙の玉」におけるパーシバル医師と手の描写

では、「手」の次のエピソード、「紙の玉」における〈手〉を見ていこう。このエピソードにおいても、手が物語のカギになっている。話は、町の医師であるリーフィと若い裕福な娘が結婚に至った経緯を語るものであるが、この医師も少し変わった人物で、自分にとって「真理」と思われることが頭に浮かぶたび、それを紙に書き留めて、誰に見せるでもなく、その紙を指で丸めてポケットに突っ込んでいた。紙玉が硬くなると捨ててはまた新たな紙玉をポケットに突っ込んだ。そのリーフィ医師を好きになった娘は、純潔を重んじる宝石商の男と、何も話さないが会うたびに彼女を暗闇に連れ込んでキスをする男という二人の男性の間で心が揺れていたのだが、どちらも選ばずに、患者として彼女を診察したリーフィ医師と結婚した。

作者アンダスンは、リーフィ医師の手を次のような描写で読者に印象付けている。「医師の手指の関節は異常なほど太かった。拳を握ると、ペンキを塗っていない木の瘤が集まっているように見えた。」（Anderson, 35；上岡, 27）[8]　続けてリーフィ医師と若い娘の出会いについて、「この物語の味わい深さは、ワインズバーグの果樹園で育つ、形の歪んだ小さなリンゴのようだった。」（Anderson, 36；上岡, 29）[9]という語りが入り、そういったリンゴは都会には出荷されず、果実摘みの者たちも摘み取らないが、知っている人はその美味しさを知っているのだ、と語られる。そしてそういったリンゴは「リーフィ医師の拳骨のような形をしている」（Anderson, 36；上岡, 29）[10]。ごつごつしたリンゴの甘さを知ってしまった人が完璧に丸いリンゴに戻る気になれないように、若い娘はリーフィ医師から離れられなくなったのだという。

この、ひねこびたリンゴの描写が小説の早い段階である第3番目のエピソードで述べられているのは、これが「紙の玉」というエピソードを象徴するにとどまらず、他のエピソードに登場するある種いびつな人々皆を象徴するものだからであろう。手摘みのリンゴとそれに似た拳を描く形で、「手」というエピソードに続きここでも〈手〉が作者によってクローズアップされている。

2.3.「母」におけるエリザベス・ウィラードと手の描写

先に述べたように、新聞記者ジョージ・ウィラードの父はホテルの経営者であるが、もともとそのホテルは母方の祖父の財産だった。そのホテルの売上は微々たるもので、

ジョージの父は今では古いホテルと自分の妻が破滅の象徴に思えて忌々しく感じていた。「紙の玉」に続くワインズバーグのエピソードは、ホテルに住む父・母・息子の愛憎関係である。母親は夫のことを俗物とみなし、自分の息子だけは夫のような俗物にはなって欲しくないと願っている。ホテルのメイドとしての仕事をするときもあるが、原因不明の病気により、ホテルに引きこもり45歳という年齢より老けて見える。息子を父親の俗物性から守らねばならないという思いが高じて偏執的になり、ある日、夫を殺して自分も死のうと考える。

> 自分の部屋の闇の中で彼女は拳を握りしめ、闇を睨みつけた。壁の釘から下がっている布袋のところに歩み寄り、細長い裁ちバサミを取り出して、短刀のように握った。「あいつを刺してやる。」と彼女は声に出して言った。「あいつは悪魔の言葉を囁いた。だから殺してやる。あいつを殺せば、私のなかで何かが壊れ、私も死ぬだろう。それで私たちはみな解放されるのだ。」(Anderson, 45；上岡, 42) [11]

実際には、その時点までなかなか顔を見せていなかった息子ジョージが自分のもとに現れて、母子は短いけれども腹を割った会話を交わすことができ、それによって憑き物が落ちたように彼女の殺意は消えるのであるが、母親の中の憎悪を表現する場面でも、前のエピソード同様、再び〈手〉がクローズアップされている。

2.4.「神の力」におけるカーティス・ハートマン師と手の描写

次に、小説中盤の「神の力」というエピソードにおける〈手〉の描写を見ていこう。このエピソードでは、牧師カーティス・ハートマンが、隣家の女教師、(彼女はジョージ・ウィラードの教師なのであるが)、ケイト・スイフトの寝たばこ姿を偶然覗き見て興奮し、自責の念に駆られる話である。聖職者であるハートマンにとって女が煙草を吸っていること自体がギョッとすることであったが、偶々、説教の原稿を書こうとしていたハートマンが壊れた窓の隙間から目にしたのは、女のむき出しの肩や白い喉で、牧師はその後、もう一度隣家のベッドの上の女の白い体を見たいという思いで眠れなくなってしまう。

この誘惑から自分を救って欲しいと牧師は神に祈る。思い悩んだ末に、自分の情欲に素直になろうと覚悟を決めて隣家を覗き見した時、裸のケイト・スイフトは、ハートマンの視線には気づかないまま、ハートマンが見ている前で、神への祈りを始めた。その後の牧師の行動と、その結果に対する牧師自身の解釈はいささか滑稽である。

> ハートマン師は［ウィラードの勤める新聞社の編集室にかけこみ］、ジョージのほうを向いて言った。「私は救済された。恐れを抱くことはない。」彼は血を滴らせている拳を青年の方へ突き出して見せた。「私は窓ガラスを叩き割ったんだ。」と彼は叫んだ。「これでガラスをすべて換えなければならなくなる。神の力が私に宿り、拳で割ることができたんだ。」(Anderson, 156；上岡, 199) [12]

ガラスを叩き割った結果、ガラスを丸々一枚取り替えなくてはならなくなれば、ガラスの割れ目からはしたない覗き見をすることが出来なくなる、それは神の力に導かれたおかげだと信じる牧師は哀れでもある。この血だらけの拳については後述する。

2.5.「変人」におけるエルマー・カウリと手の描写

小説の終盤に描かれるエピソード、「変人」においても、手が登場人物の思いを伝える役割を果たしている。エルマー・カウリは、町の「何でも売っているが何も売れない店」(上岡, 250) であるカウリ＆サン商会の息子である。ワインズバーグに来て間もないが、自分と自分の家族が町の人々から〈変人〉だと思われていると思い込み、町のあちこちに現れては町の話を聞いて回るジョージ・ウィラードこそ、ワインズバーグを代表している人物であると思い定め、自分達が変人だという意見を代表しているのがジョージであるという逆恨みの感情を募らせていく。彼には、うんざりした気持ちを表す独特な独り言があり、それは「俺は洗われて、アイロンをかけられて、糊でごわごわにされる」(Anderson, 193；上岡, 254) [13] である。町には自分にとっての友人がいない、他人からは〈変人〉と思われているに違いない、という居心地の悪さ、所在のなさを、洗濯・アイロンという手仕事と「糊でごわごわ」という手の感覚で表現するのも、〈手〉にフォーカスしているこの小説ならではのセリフだ。

うだつの上がらない自分の父親にもワインズバーグにも嫌気がさしたエルマー・カウリは、店の金を持ち出し、町を

出ようと決意するが、町を代表している（とエルマーには思える）ジョージ・ウィラードに「自分は変人でない」ことを思い知らせてから出発したいと企図し、ジョージを駅に呼び出す。しかし実際にジョージに対面すると、上手く言葉が出てこない。代わりに、エルマーは持って来た自分の店の金をジョージに渡す。そして鬱屈した自分の気持ちを言葉にできないやるせなさから、何の説明もなくジョージに殴りかかるという突発的行為に及ぶ。

> 彼［エルマー・カウリ］は二枚の十ドル札をポケットから取り出し、それをジョージ・ウィラードの手に押しつけた。「受け取れ」と彼は叫んだ。「俺はいらない。これを父に返してくれ。俺が盗んだんだ」。怒りの唸り声をあげて彼は振り向き、長い腕を振り回し始めた。自分を掴んでいる手から逃れようとするかのように、ジョージ・ウィラードに飛びかかり、胸や首や口を何度も何度も殴った。…略…「やつに見せてやった」と彼は叫んだ。「やつにもわかったはずだ。俺はそんなに変人じゃない。俺が変人じゃないってこと、やつに見せてやったぞ。」（Anderson, 201；上岡, 265–266）[14]

当然、言葉による経緯や気持の説明がないために、ジョージ・ウィラードにはエルマーの行為の訳が分からず、呆然とするしかなかったのだが、「変人」エルマー本人は手を出すことで解からせることが出来たのだと悦に入っているのである。わかってもらいたいが通じないやるせなさを募らせた後に、手で殴ることで気持ちが通じたと思うエルマーに対して、読者の心におかしみと切なさを呼び起こす場面であり、ここでも手が強調されている。

2.6.「死」におけるエリザベス・ウィラードと手の描写

結果的にジョージ・ウィラードがワインズバーグを離れる契機となる母親の死が描かれているのが、「死」というエピソードである。死期が近づいたとき、ジョージ・ウィラードの母親エリザベス・ウィラードは、〈死〉を自分の待ち人のように思うのだった。そして〈死〉を手につかもうとして手を伸ばす。

> 病んだ女は死を渇望して人生の最後の数か月を過ごした。飢えた者が食料を求めるように、死に至る道を進んで歩んだ。彼女は「死」に人間の姿を与え、いろいろな男の姿で思い浮かべた。…略…部屋の闇のなかで彼女は手を伸ばし、ベッドカバーの下から上に向かって突き出した。そして、「死」が生き物のように手を差し伸べているのだと思った。（Anderson, 228；上岡, 306–307）[15]

小説の話の流れで、ターニングポイントとなる出来事を描くときに、人が死に向かうさまを愛しいものに差し伸べる〈手〉として、具体的に手の動きを描写していることからも、やはり、〈手〉が本作品において中心的役割を果たすものだということが言える。

3. 労働の〈手〉、受難の〈手〉、癒しの〈手〉

以上のように、『ワインズバーグ・オハイオ』における〈手〉の描写は、各エピソードの登場人物の孤独な気持ちを表している場合が多くみられるが、この作品における〈手〉の役割はそこにとどまらない。〈手〉は、労働を表し、受難を表し、また、癒しの象徴でもある。

エピソード「手」においてウィング・ビドルボームの手の動きは同性愛の誘惑者としても描かれたが、もう一つの側面は、労働の〈手〉である。

> ワインズバーグでは、彼［ウィング・ビドルボーム］の手は単純にその動きのために注目を集めた。その手を使ってウィング・ビドルボームは一日に百四十クォートものイチゴを摘んだのである。（Anderson, 29；上岡, 18）[16]

また、続く「紙の玉」のエピソードにおいても、リンゴの収穫の様子がリーフィ医師の求愛物語の合間に挿入されている。一部重複するが再び引用する。

> この物語の味わい深さは、ワインズバーグの果樹園で育つ、形の歪んだ小さなリンゴのようだった。秋に果樹園を歩くと、地面は霜で硬くなっている。リンゴはすでに果実摘みの者たちによって木からもぎ取られ、樽に詰められて、都会に向けて出荷されている。…略…木々に残っているのは、果実摘みの者たちが取らなかった、数個のごつごつしたリンゴだけ。（Anderson, 36；上岡, 29）[17]

労働を象徴する手の動きが描かれている一方で、磔刑のキリストの受難を連想させる場面にも手が使われている。前述の牧師ハートマンの血まみれの拳からもそれは連想できるが、「哲学者」というエピソードの中の〈手〉の描写においてもキリストのイメージが現われる。このエピソードの主人公は、いつか自分の中の哲学的な思索を本にして出版したいと思っているパーシバルという名の風変わりな医師であるが、彼はワインズバーグで少女が馬車から放り出される事故が起きた時に、人が彼を呼びに行ったにも関わらず、死にそうな子どもを診に行こうとはしなかった。自分が往診を拒んだことで町の人々から恨まれて縛り首になるだろうと医師は考える。その時、医師はキリストを引き合いに出してジョージ・ウィラードにこう語る。「世界中のみんながキリストであり、磔にされている。わしが［いつか書こうとしている本で］言いたいのはそれさ。忘れないでくれ。」(Anderson, 57；上岡, 56) [18]

皆が磔にされている受難者であるというイメージを喚起する描写は、このエピソードの冒頭の何気ないシーンにも表れている。町の酒場で、ジョージ・ウィラードの新聞社の編集長が酒を飲んでいる場面だが、酒場の主人トム・ウィリーの人物像にわざわざ手のあざのことが書かれている。

> 酒場の主人は背が低く、肩幅の広い男で、手に独特の染みがあった。男や女の顔をときどき燃えるような赤に染める母斑が、指や手の甲を赤く染めていたのである。……両手を血のなかに浸け、その血が乾いて色褪せたかのようだった。(Anderson, 49–50；上岡, 48) [19]

作者はわざわざ手の染みを血に例えることで、このエピソードの最後の言葉であるパーシバル医師の磔刑の話とともに、誰もが苦しんでいるのだというメッセージを強調している。

また、〈手〉は親子の情愛の場面にも愛情を示すものとして描かれる。「狂信者」というエピソードは、自分の孫がキリストの生まれ変わりだと妄信する老人とその娘、孫についての物語である。狂信的な男の娘、癇癪持ちのルイーズ・ハーディという女性は、子供への関心が薄い生活をしていたが、行方知れずになった息子が家に戻った時、それまでとは別人のようになって、息子をきつく抱きしめ、自分の手で体を洗ってやり、食事を作ってやり、息子にガウンを着せて一時間ずっと抱きしめていた。(Anderson, 77；上岡, 85) [20] 息子は母親に優しくされたことで、自分が迷子になった後で起きた母親の変化を幸せに感じる。

以上のように、〈手〉は孤独を描く以外にも『ワインズバーグ・オハイオ』の各エピソードを繋ぐように繰り返しクローズアップされて描かれている。

4.「手を伝う病」を喚起する要因と社会の閉塞感

〈手〉の描写が話の要になっていることを例示しながら述べてきたが、人々の不安感と共鳴する小説という観点から『ワインズバーグ・オハイオ』を考えてみたい。『ワインズバーグ・オハイオ』が出版された年は1919年、「スペイン風邪」がアメリカで猛威をふるった年であった。この新しいインフルエンザが蔓延した頃の人々の不安感はとてつもなく大きなものであっただろう。大きな時代の変化の中で人々のなかでは孤独感や不安感が広く共有されていただろう。『ワインズバーグ・オハイオ』は、スペイン風邪についての物語ではないが、その中の登場人物たちは皆、孤独を共有しており、それは、〈手〉の描写を中心に描かれている。彼らは皆一様に孤独であるが、その孤独は言葉として以上に感覚として伝わる種類のものである。まるで「手を伝う病」のように。小説の中の人々の孤独感は決して大きな社会イベントにつながるわけではない。デモもなければ革命もない。けれども、さびれたホテルの風情や、労働で疲れた人々の厭世的な気分と共に、「手触り」として共有される閉塞的な田舎町の「空気感」こそが、作者が伝えたかったものなのではなかろうか。

結び

『ワインズバーグ・オハイオ』では、手工業から工場での大量生産へ変わる激動の時代に、さびれていく片田舎の停滞感、閉塞感の中で人々が孤独にさいなまれている様子が、手の表現を多く用いて陰影深く描かれている。現代の世界を鑑みるに、私たちの生きる現在、手で伝わる新たなウィルスが猛威をふるっている中で、私たちも生活様式の大きな変化を余儀なくされている。密集密接を避けるように言われ、大きな集会などは開催できない。会いたい人にも会えない。けれども、未知のウィルス感染への恐怖は社会の一

人一人皆が共有している。個々人が分断されているようで、実は閉塞感や停滞感は共有されている。パンデミックの世の中から〈手〉に焦点を当ててこの百年前の小説を読み返すことで、『ワインズバーグ・オハイオ』は、大きな時代の変換期を生きる人々を、感覚として描くのに成功していることがわかる。そしてそのような普遍的要素があるからこそ『ワインズバーグ・オハイオ』は読み継がれてきたのであるし、これからも読み継がれるに値する作品と言える。

注

1) アンダスンのアメリカ文学史上の位置づけは、マーク・トウェインから、フォークナーやヘミングウェイへの橋渡しをした作家と言われている。フォークナーやヘミングウェイの作品には、しばしば孤独な人物が描かれているが、本論では、フォークナーやヘミングウェイに先駆けて孤独な人物像を描いた作家としてアンダスンを取り上げる。
2) Within him there is a secret something that is striving to grow. Anderson の引用はペンギン版による。読者の便宜を図り、上岡による日本語訳のみ本論の本文に記載し、それぞれの引用個所を記し、該当する原文の引用個所は注に記載する。
3) サブタイトルの原文は HANDS / PAPER PILLS / MOTHER / THE PHILOSOPHER / NOBODY KNOWS / GODLINESS / A MAN OF IDEAS / ADVENTURE / RESPECTABILITY / THE THINKER / TANDY / THE STRENGTH OF GOD / THE TEACHER / LONELINESS / AN AWAKENING / "QUEER" / THE UNTOLD LIE / DRINK / DEATH / SOPHISTICATION / DEPARTURE であり、日本語訳は上岡による。
4) 林茂雄、1968年
5) "He put his arms about me," said one. "His fingers were always playing in my hair," said another.
6) Their [Biddlebaum's hands'] restless activity, like unto the beating of the wings on an imprisoned bird, had given him his name.
7) One afternoon … calling Adolph Myers [=Wing Biddlebaum] into the school yard he began to beat him with his fists. ... As his hand knuckles beat down into the frightened face of the school master, his wrath became more and more terrible.
8) The knuckles of the doctor's hands were extraordinarily large. When the hands were closed they looked like clusters of unpainted wooden balls as large as walnuts fastened together by steel rods.
9) It is delicious, like the twisted little apples that grow in the orchards of Winesburg.
10) They [The twisted little apples] look like the knuckles of Doctor Reefy's hands.
11) In the darkness of her own room she clenched her fists and glared about. Going to a cloth bag that hung on a nail by the wall she took out a long pair of sewing scissors and held them in her hand like a dagger. "I will stab him," she said aloud. "He has chosen to be the voice of evil and I will kill him. When I have killed him something will snap within myself and I will die also. It will be a release for all of us."
12) Reverend Curtis Hartman turned … again to George Willard. "I am delivered. Have no fear." He held up a bleeding fist for the young man to see. "I smashed the glass of the window," he cried. "Now it will have to be wholly replaced. The strength of God was in me and I broke it with my fist."
13) "Well, well, I'll be washed and ironed and starched!"
14) Taking the two ten-dollar bills from his pocket he [Elmer Cowley] thrust them into George Willard's hand. "Take them," he cried. "I don't want them. Give them to father. I stole them." With a snarl of rage he turned and his long arms began to flay the air. Like one struggling for release from hands that held him he struck out, hitting George Willard blow after blow on the breast, the neck, the mouth. ... "I showed him," he cried. "I guess I showed him. I ain't so queer. I guess I showed him I ain't so queer."
15) The sick woman spent the last few months of her life hungering for death. Along the road of death she went, seeking, hungering. She personified the figure of death ... In the darkness of her room she put out her hand, thrusting it from under the covers of her bed, and she thought that death like a living thing put out his hand to her.
16) In Winesburg the hands had attracted attention merely because of their activity. With them Wing Biddlebaum had picked as high as a hundred and forty quarts of strawberries in a day.
17) It is delicious, like the twisted little apples that grow in the orchards of Winesburg. In the fall one walks in the orchards and the ground is hard with frost underfoot. The apples have been taken from the trees by the pickers. They have been put in barrels and shipped to the cities ... . On the trees are only a few gnarled apples that the pickers have rejected.
18) "It is this ... that everyone in the world is Christ and they are all crucified. That's what I want to say. Don't you forget that. Whatever happens, don't you dare let yourself forget."
19) The saloon keeper was a short, broad-shouldered man with peculiarly marked hands. That flaming kind of birthmark that sometimes paints with red the faces of men and women had touched with red Tom Willy's fingers and the

backs of his hands. ... It was as though the hands had been dipped in blood that had dried and faded.

20）With her own hands, Louise Hardy bathed his tired young body and cooked him food. She ... sat down in a chair to hold him in her arms. For an hour the woman sat in the darkness and held her boy.

参考文献

Anderson, Sherwood. *Winesburg, Ohio*. New York, Penguin Books, 1986. First published 1919.

アンダスン、シャーウッド『ワインズバーグ・オハイオ』上岡伸雄訳、新潮社、2018年。

バリー、ジョン『グレートインフルエンザ』平澤正雄訳、共同通信社、2005年。

林茂雄「『ワインズバーグ・オハイオ』── その「夢」としての一面について」、立命館大学『外国文学研究』1968年。

How much do hands convey? : The depiction of "hands" in Sherwood Anderson's *Winesburg, Ohio*

WASHIYA Satomi

Sherwood Anderson's novel *Winesburg, Ohio* (1919) is popular both in the USA and Japan. All the characters in this novel suffer from loneliness in a drastically changing society. In this essay, the depiction of hands is carefully examined and the study leads to the conclusion that the author successfully conveys the shared feeling of loneliness using the "hands" depiction.